

# 轍わだち

2012, 10. 11 NO37

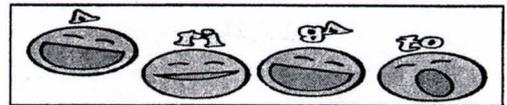
この思いに共感しながら

長女8才、長男3才二人の子どもを津波で失った南相馬市の男性39才は、警戒区域の一部に入れるようになった朝、妻から「子どもを見つけてきて」と言われた。消防団員として今なお遺体の捜索に当たる身でありながら、我が子の遺体を見つけれない。「遺骨一つでもいいこれからもずーと探し続けるんですよ。僕は」僕の膝にはいつも子どもが座っていた感触が残っていて…」彼が言う「仮設に住む人がいなくなって、食べていく仕事が見つかって。亡くなった人たちのことを背負いながら時々泣いてさ。それでも前を向けるようになったらそれが「復興」じゃないかな」と。

「震災のことが忘れられてしまうのが怖い。」死者・不明者が最も多かった石巻市では今でも被災したままの住宅の一部に住んでいる人が少なくない。そんな人々の声の聞き取りが進められているが「生きる希望がない。死んだ方がまし。」と答える人々へ返す言葉を探しかねる心のケアボランティアの人々。

夫と息子二人を失い、ひとりぼっちになった彼女の日課は、3人の遺影に向かっての会話だ。3人の誕生日にはケーキを供え、時々開かれる同じ境遇のお母さん達の会へ出向いていき、写真を見せて「うちの子かわいいでしょう」と泣きながら笑うという。

## 笑顔応援団募集中

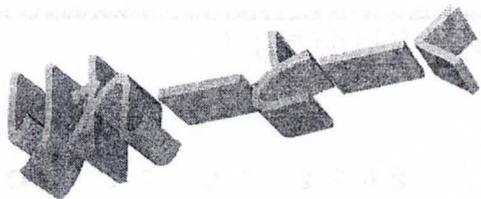


文化祭でも、オープンスクールでもたくさんの笑顔を撮らせてもらいましたが、まだまだ送るアルバムの全ての表紙を埋めるまでには不足しています。引き続きご協力下さい。「私の笑顔で被災地を応援します」と思う人は最寄りの実行委員に声をかけて下さい。お願いします。

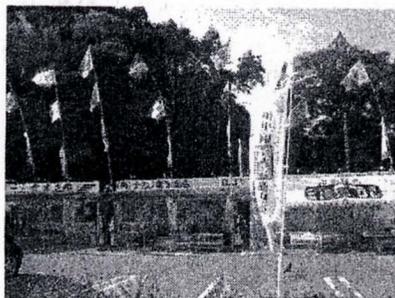


「癒しのC.Dに是非、詩をつけて欲しい」との要望が被災者から寄せられました。そこで皆さんにお願いがあります。あなたの好きな言葉を寄せて下さい。そのことばを繋げる形で詩を作ります。もちろん詩として投稿して頂いてもOKです。昼休みを利用して曲を流します。玄関の掲示板に投稿箱を設置します。募集期間は10月中です。

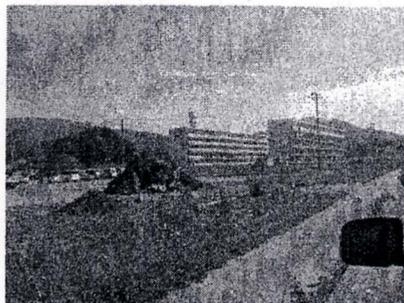
## 癒しの言葉募集中



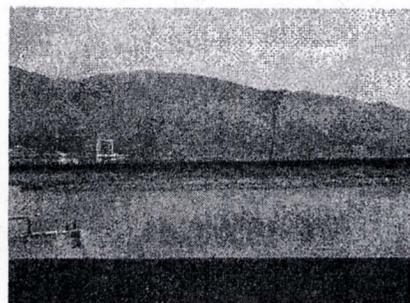
仮設店舗と大漁旗がなびく一角に、プランターに植えられた草花が枯れかかっていた。8月の終わりに、3回目の被災地訪問の機会を得て尋ねた町の景色は、復興とはほど遠かった。今回は、前回立ち入ることができなかった陸前高田市内全域を回ってみた。一面見渡す限り夏草が生い茂げているだけで何も無い。所々に瓦礫が積み上げられている。鉄筋の建物が壊れたままの状態をさらしていた。図書館だった建物の中に足を踏み入ると壁に書かれた言葉が胸に突き刺さった。この建物の中で亡くなった母親へあてた感謝の言葉だった。海辺に面して建てられていた6階建てのマンションの6階まで津波が襲ったことを証明するように2棟のマンションは外観だけを残していた。高台へ向かう斜面の杉木立はてっぺん付近まで枯れていた。数日後に保存のために切り倒される「奇跡の1本松」も立ち枯れていた。高台へ車を走らせ町を一望し再び愕然とする。何もかもが津波にさらわれた町。その町を望む形で斜面に仮設住宅が密集して建てられていた。時折走るトラックの荷台には瓦礫が積み上げられていた。



仮設店舗



6階建てマンション



奇跡の一本松

2012年8月26日 今井千和世

## 感謝！寄付！

生徒会から … 模擬店の収益金の一部を東日本被災地応援実行委員会へ寄付金 7万円いただきました。カメラとアルバムを購入させていただきます。

### お箸とバンダナの売り上げ…

文化祭とオープンスクールで展示を行いながら販売活動をした結果2万3000円の売り上げがありました。10月21日に開催される SeeL フェアでも頑張って販売します。

**震災に関連した本が図書館に入っています。**

**是非読んでみて下さい。**

**奇跡の一本松（絵本） おもかげ復元師 心のおくりびと 阿武隈共和国**